

第4号議案 2010年度活動計画

パルシック

PARC Interpeoples' Cooperation

1. はじめに

パルシックは、地球上の各地で暮らす人々が国民国家の壁を乗り越えて直接的に助け合う姿を目指しますが、この目標は容易ではありません。10年活動が続けてきた東ティモールでも、何が本当に助けになるのかと悩むこともしばしばです。私たちは、人々が互いに助け合って生きていくという社会を目指しているので、3年間の協力事業で出口が見えて支援対象が自立できるというようには考えておりません。数百年の間に培われた格差や貧富はそんなに簡単に埋められるものではないと思いますし、さらに日本に住む私たちが、東ティモールのコーヒーに依存しているように助けあいは相互的なものだと思うからです。しかし、そのなかでも人間的で対等な関係の形成につながるものとして、スリランカ事務局、東ティモール事務局、東京事務局の三角形を起点にさまざまな交流と協力、交易のネットワークを築き上げていきたいと考えて、2010年の活動を行います。

パルシック立ち上げの年だった2008年に続き、2009年はスリランカや東ティモール、さらにはマレーシアでの民際協力事業の方向を形成する年でした。コンサートを実施して日本社会での認知を得、フェアトレード事業のための基礎をつくらうとしてきました。2010年からの2年間は、2008年に開始した事業をしっかりと固め、このネットワークの意味を考え、それを国内外で広げる年にしたいと考えています。

2010年は、パルシックとして築こうとする交流と協力、交易のネットワークを広げ、そのなかで民際協力とフェアトレードを結び付けて発展させることに力を注ぎます。南北の不正を変え、国境を越えて、ネットワークや共通の規範、信頼に基づく社会資本を形成すること、そのなかでジャフナの干物づくりや東ティモールのコーヒー生産事業をともに発展させていきたいと考えます。

具体的な活動としては、第1に日本国内における営

業力をつけて東ティモールのコーヒー生産者、スリランカの紅茶生産者をしっかりと支える力をつけること、第2にスリランカが大きな転換を迎えた今日、その復興支援への取り組みを強化しながらスリランカの平和構築、多民族共生社会の実現のために何ができるか、何をすべきか、という議論を日本の市民社会や援助関係者の間に広げ、またパルシックとしての取り組みを考え、実践します。そして第3に、パルシックとしてのネットワークを広げるために①パルシックの基礎力として協力者、支援者の裾野を広げ、そのためにも②事業地、産地の背景情報の発信を充実させることを重点化すること、③それを担う東京事務局の強化を目指します。

2. 民際協力事業

パルシックは、民際協力において、人々の自立的で持続可能な暮らしと経済を成り立たせるような支援を行おうと考えており、そのような経済自立支援＝生業支援において製品の市場を確保するということは、支援の出口として重要であると考えています。農民や漁民たちの生産者協同組合に、しっかりと社会的企業として生産者の暮らしを守る活動をする力をつけていくことが重要であると考えています。そのためのマーケティングやマネジメントの研修をしていくことが必要となってきます。パルシックとして、その分野の優れた教材をつくったり、トレーニングカリキュラムを開発することが課題となっており、2010年度は下記のような各地での活動経験を通じて、そのような能力を発展させていきたいと考えています。

1) 東ティモール

パルシックが東ティモールのコーヒー生産者支援事業を開始して9年目になります。パルシックが東ティモールでコーヒー生産者の支援に集中してきたのは、コーヒーがほとんど唯一の輸出品だからです。次ページ表1は、東ティモール政府発表の統計です。

の収入で、機材の補修から事務局運営費までの費用を賄って自立できるためには、組合として400世帯位の規模が必要だと考えており、順次拡大しています。並行してコカマウの役員たちに生産者協同組合の役割について教育していきます。

③ コーヒー畑の改善と植林事業

東ティモールのコーヒーの木は樹齢が30年と古いものです。そのためにコーヒーの木の台切りによる若返りと、コーヒーの木や果樹の苗床作り・栽培は、東ティモールのコーヒー生産者が収量を確保するために、そして東ティモールのコーヒー畑が10年後も実をつけつづけるために重要な課題です。同時にはげ山が多く水の枯渇や川の急増水が深刻になっている東ティモールの山間部において、植林はコーヒーの日陰樹である重要ですので、継続してコカマウとともに取り組みます。

④ サココの支援

2009年から開始したエルメラ県エルメラ郡ポニラ村サココ集落のコーヒー生産者協同組合の支援を2010年には本格的に行います。パルシックとしてもロブスタ種の加工は初めてなので、工夫しながら約30世帯の農家とともにロブスタ種の加工と輸出に取り組んで、2010年は1コンテナを輸出してロブスタの農家にもフェアトレードによる恩恵が感じられるような支援をしていきたいと考えています。

⑤ 女性の食品加工

2009年度に6つの女性グループがそれぞれ自分たちで取り組みたいという商品を決めました(活動報告参照)。2010年はいよいよ生産開始です。女性たちが最初の意欲を維持して、しっかりと持続的な取り組みとできるためには、比較的早いうちに現金収入につながる必要があります。秋くらいには一部のグループは収入が得られることを目標にします。同時に他の地域の女性グループとも交流して女性起業家を生み出したいと計画しています。

表2 2010年のコカマウ拡大計画

村名	集落名	2009年		2010年(予定)	
		組合員	準組合員	組合員	準組合員
アイトゥ村	クロコ	28	14	28	14
	マウレフォ	22	8	22	8
	ベトゥララ	5		5	
マウベシ村	レボテロ	24		24	
マウライ村	リタ	32		32	
	ルムルリ	32	21	32	21
	ハトゥカデ	25	6	25	6
	リティマ	18		18	
マネットウ村	ルスラウ	9		9	
	ハヒタリ			14	
	マウライ			12	
エディ村	ロビボ			14	
小計		195	49	235	49
組合員・準組合員合計			244		284

2) スリランカ

2010年はスリランカの民族問題と平和構築にとって重要な年となるでしょう。1月の大統領選挙と4月の国会選挙で多数派を確保した現政権は、北部の復興に本格的に取り組むでしょう。しかし、それが民族和解と平和構築の方向に向かうために私たちはなにをすべきかを絶えず問いながら以下の活動を進めていきます。



① ジャフナでの乾燥魚支援事業

2006 年内戦が再燃する前に、パルシックは、ジャフナの漁村の女性たちに乾燥魚の技術改善をして品質の良い干物をつくり、女性たちの収入を上げるような事業を実施していました。スリランカの人々は日本と同様に干物(乾燥魚)を好んで食する習慣があるからです。国内で消費された総漁獲量のうち、4分の1近い24%が乾燥魚として利用されていたのです(2004年)。冷蔵冷凍施設が限られていることから、スリランカ国において乾燥魚加工は唯一の保存方法といえました。とくに内戦で基礎インフラがすべて破壊されたジャフナ県では氷の入手もままならず、漁獲が多い時にはすかさず干物にしてしまわないと魚がダメになってしまいます。ですから、どこの漁家でも売れ残ったり、多すぎた漁獲を妻がすばやく割いて干物にします。この干物の品質を改善し、衛生的にすることで価格を引き上げ、とくに漁村に多い寡婦世帯の所得としようとしています。2006年に内戦が再燃し、漁業が規制されたことで中断していましたが、2010年度より再開します。4つの漁村で、漁業協同組合と協力し女性たちを組織して、美味しく衛生的な干物をつくり、ブランド名をつけたジャフナ産干物としてコロンボなどの市場で高い価格で売れるようにし、戦後のジャフナの漁村

表3 乾燥魚の生産量および輸入量と1人当たり消費量

	単位	1995	2000	2005	2006	2007	2008
生産量	1000 mt	12.09	24.36	7.56	33.40	36.20	38.65
在庫からの出庫	1000 mt	0.15	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
入量	1000 mt	44.80	50.55	44.61	44.75	48.06	44.86
総供給量	1000 mt	57.04	74.92	52.18	78.16	84.25	83.50
1人当たり消費量	Kg/Yr	3.30	4.06	2.65	3.96	4.21	4.13

出所： Statistics Unit - Ministry of Fisheries and Aquatic Resources

注1: 2005年の生産量が激減しているのは津波被災により漁獲量が激減したため

で女性たちが誇りをもって生きていけるようにすることを目指します。

表4 乾燥魚事業実施予定の村

郡	村
ヴァダマラッチ・イースト郡	マナックドゥ村
ヴァダマラッチ・ノース郡	トゥンバライ・イースト村
カライナーガル郡	アンバル村
ヴァラナイ郡	トライユール村

② スリランカ北部の復興事業への関与

上記、ジャフナにおける乾燥魚事業を柱としながらも、ジャフナおよび北部全般の復興開発、その方向性を注意深く見守りながら、地域の住民の生活再建がなされ、かつ人々の間に、信頼と誇りを取り戻すことができる方向で復興がなされるように、機会をとらえて、発言や協力をしていきたいと考えています。併せてそのために日本国内でも継続的に関係者間の勉強会などの機会をつくっていきます。

③ スリランカ南部でのキトル生産者支援



内戦終了後のスリランカにおいて、北部と南部への支援のバランスをとることも重要であると考えます。南部州のシンハラージャ熱帯林保護区に隣接するデニヤヤ地区で、クジャクヤシの樹液からとるキトルの生産を支援するプロジェクトを始めます。6~

10の村にリーダーを育成し、各家庭から採れたての原液を集めて作ったキトルの加工改善、販売促進のプロジェクトです。

各家庭ではヤシの木に花が咲くと、その花を切り、覆いをし、樹液を採取します。1 晩たまったものを、ろ過して不純物を除き 3 時間ほど煮立てるとキトルができるのです。細火で 5-6 時間煮詰め、椰子殻にあげると Jerggry という固形物になります。これを各家庭で 15 分くらい煮立てたものを原液として買取り、加工所に集めてさらに 2-3 時間煮詰め、均一な品質を確認して、糖度などを測り、瓶詰めする計画です。現在スリランカではキトルは一般的な甘味ですが、純粋なキトルは入手が難しくスーパーなどに出回っているものには砂糖が添加されています。したがって、純粋なキトルは高く売ることができません。このプロジェクトはスリランカの NGO、SEWALANKA との協力で行います。なおこの地域はルフナという紅茶の産地でもあり、この地方の紅茶はエステートではなく、小規模農民たちが個人で生産しているので、この紅茶生産への協力も将来の課題としていきたいと考えています。

④ 紅茶園支援

ウバ紅茶の産地、ウバ州ハプタレの紅茶園グリーンフィールドを昨年度調査するなかで、紅茶園の民営化とともに紅茶園に居住する人たちが必ずしも紅茶園労働者として雇用されているわけではなく多くが失業中であることを知りました。紅茶園に居住する失業者たちに職業訓練し、農業指導をして所得が得られるようにするプロジェクトをぜひ実施したいと考え、資金を確保する方法を模索中です。

3) マレーシア

2009 年に民際協力事業の新しい現場として提案した PIFWA (ペナン浅海漁民福祉協会) という漁民団体を支援する事業に、2010 年度から本格的に取り組みます。沿岸水産資源の復活をめざしてマングローブの植林を開始し、さらに川沿いのハッチェリー(稚エビの孵化工場)で手長エビの稚魚を育成し、

放流して持続可能な漁業を目指しています。パルシックは資金の見通しがついた時点で 5 年程の計画で PIFWA の支援を行いたいと考えています。同時に PIFWA の活動を広くマレーシア国内そして日本社会に知らせ、漁業者や NGO、都市住民の間に環境保全と持続可能な漁業に関する問題意識を高める活動を行い、マレーシアや日本の青年がマングローブ植林に参加するようなツアーを組もうという計画です。

残念ながら資金を得られなかったので 2009 年度中に着手することができませんでした。2010 年度にイオン財団からマングローブ植林の助成が得られたので 2010 年度に事業を開始することができるようになりました。併せて今年から、ツアーの取り組みを開始し、交流を強化します。

3. フェアトレード事業

1) コーヒー／紅茶

2010 年度は、とくにコーヒーと紅茶の販売に力を入れます。コーヒーは生豆販売、ドリップパック販売を現在の 3 倍くらいまで拡大していき、安定した数量の販売を確保していきたいと計画しています。販路としては従来の関係者、友人への販売を一步乗り越え、大手量販店なども視野にいれた営業活動を行います。東ティモールのコーヒー生産者協同組合の拡大に伴う生産量の増大を視野に入れ、その全量売り切って 2012 年以降の新しい支援の段階に入ることを準備します。

2) ハーブの商品化

東ティモールで栽培されたコモンマロウ、カモミール、レモンバーム(あるいはバジル)の 3 種を中心に試験栽培と市場調査を開始し、今年中に商品化についての判断を出したいと考えています。

3) フェアトレードの推進

世界的にフェアトレードは円熟し、同時に大手企業の

参加をどのようにとらえるか、あるいはそれを可能にしているフェアトレード認証の功罪などの点で問題点や矛盾もでてきています。日本でのフェアトレードは、これからの2-3年にさらに成長すると同時に同様の問題に直面するのではないかと考えられます。フェアトレード団体自身が自らの規範で自己検証することも必要かと考えられます。パルシックとしては、コーヒー生産者や紅茶園の住民への支援を強化する一方で、パルシックの考えるフェアトレード規範のようなものを論議しつつ、フェアトレード推進のための他団体との協力関係を強化していきたいと考えます。2010年度の5月8日の世界フェアトレード・デーにも他の団体と協力して参加します。並行してフェアトレード月間である5月に、JICA地球ひろばで二週間「東ティモール:フェアトレードコーヒーのできるまで」という写真展を実施します。

4. ツアー計画

現場を訪ね、人と人が出会うツアーに今年から力を入れていきたいと思えます。第一にパルシックが現場としている地域をよく知っていただくこと、第二に支援者を広げることを目的としています。2010年は次の3つのツアーを企画しています

1) 東ティモール・コーヒー生産者を訪ねる旅 (8月28日～9月5日)

「カフェ・ティモール」の生産地を訪ね、コーヒーの収穫、加工を生産者と共に体験します。

2) スリランカ・美味しい紅茶の産地を知る旅 (7月17日～24日)

ウバとルフナ、2ヶ所の紅茶産地を訪れ、紅茶とスリランカの歴史や、そこで働く女性たちの生活に触れます。

3) マレーシア・漁民とともにマングローブを植える旅 (12月19日～25日)

19世紀英国植民地時代の面影を残すペナンで、伝統的な漁法を守り、マングローブ植林、手長エビの稚魚放流などの環境保全活動に取り組む漁民グループを訪問します。

5. 国内・広報事業

① スリランカ討論集会の開催

2009年度に引き続き、スリランカの変化する状況をウオッチして、日本の市民社会として何をすべきかを、NGO、研究者、ジャーナリスト、ODA関係者などの間で、議論できるような勉強会を継続的に開催し、ゆるやかなネットワークを形成するようにします。

② 報告集会「東ティモールにおける協同組合」

2010年10月、東ティモール政府の協同組合局長を招いて、日本の農業協同組合を訪ねますが、その成果と東ティモールにおける協同組合発展の現状をご報告します。

③ コーヒー・紅茶講座

昨年の紅茶講座につづけて、今年度は3-4回の紅茶、コーヒー講座を開催し、ご愛飲くださっている皆様とともに、コーヒー、紅茶の知識を深めたいと考えています。

④ 情報発信の充実

民際協力ニュースは引き続き年に2回の発行としますが、2009年度の反省を生かして、東ティモールやスリランカ、マレーシアの地域の情報、生産者の声をWEBおよびメール発信でもしっかり伝えていくようにホームページのデザインも変更していく計画です。動きの伝わるような発信の仕方を工夫します。

⑤ サポーターおよび法人会員の拡充

そして情報発信をサポーターや支援者の拡大につなげるためにはどうすべきかを考えて、これから2-3年間で実現する課題としていきます。

⑥ 事務局の強化

以上の活動をパルシックのスリランカ、東ティモール、東京の各事務局と理事会が、会員、ボランティアの皆様との協力を得て実施します。情報の流通などの要となるのは東京事務局です。「情報発信の充実」、「サポーターおよび法人会員の拡充」と併せて「東京事務局の強化」は今後2年間の重点課題です。